

## フリーエネルギーの発見(6)

(1088V で共振)

渡辺 満 (静岡県)

### §0 はじめに

次の段階の「エネルギー回収・出力」へ進む前に、  
ここまでの結果を、万全にしようと考え、下記の修正を行った。

- 1)配線に使用している導線を、もっと太くする。
- 2)共振電流の通過する部品を、  
耐圧 1000V かつ、アンペア(A)の大きい物に取り替える。
- 3)スパイクノイズを除去する。

これに伴い、パルス電流発生用のコイル 0 を強化した。  
電源は、DC6V(AC アダプター)のままである。  
その結果、共振は 960V に達した。(その後 1088V に)

#### ● 導線を太く

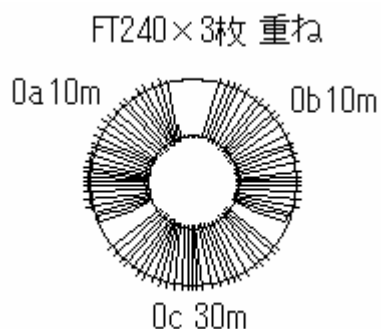
回路は簡単なため、ブレッドボードの上に、  
秋月電子で購入したブレッドボード・ジャンパーコードを使用していたが、  
これは細すぎて、電流がよく通らないようなので、  
ブレッドボードに最適だという、0.65mmφのビニル電線(単線)  
(SHW-S 0.65 L-10)に換えた。

#### ● 新たな部品

- ・コンデンサ 0.1  $\mu$ F(1000V)  
(3A104J)シズキメタライズドポリプロピレンフィルム TMPP シリーズ  
(購入先:三栄電波)
- ・2SK3799 パワーMOSFET(N-ch 900V,8A) (購入先:千石電商)
- ・整流ダイオード(1000V,10A) (購入先:秋月電子)

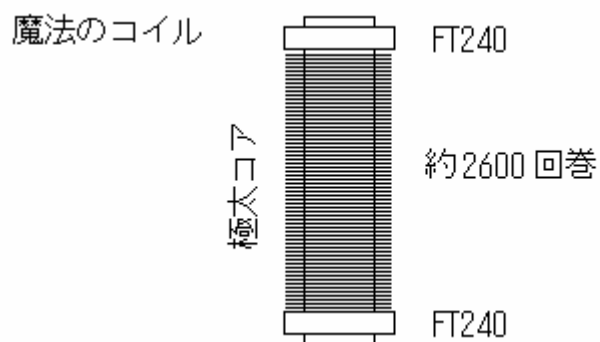
## §1 コイル

### ●コイル 0



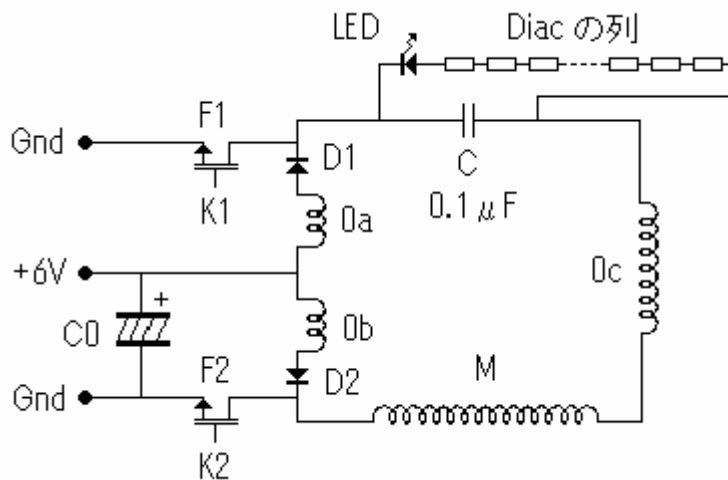
コイル 0 は、トロイダルコア FT240 を 3 枚重ねて、  
 その上に、0.6mmφのポリウレタン線を上図のように巻いた。  
 5m 単位で巻くと容易。  
 配線においては、0a と 0b の作る磁束は、互いに逆向きになるように、  
 する必要がある。（相手を打ち消すので、起電力が強くなる。）

### ●魔法のコイル



極太フェライト・コア(34mmφ、長さ 200mm)(購入先:ラジオ少年)に、  
 0.65mmφのポリウレタン線を、約 340m 巻いた。  
 約 2600 回巻き、電気抵抗は 17Ω。  
 これを、下記の回路に、コイル M として組み込む。

## § 2 回路



D1,D2 : 整流ダイオード(1000V,10A)  
 C : 0.1  $\mu$ F(1000V)  
 F1,F2 : 2SK3799 MOSFET(N-ch 900V,8A)  
 LED(12V 用)  
 C0 : 9400  $\mu$ F(4700  $\mu$ F  $\times$  2 個)

C0 は、これらの実験の当初から、組み込んでいたもので、  
 ずっと、そのままで使用している。  
 回路的には等価だと思い、前回の(4).pdf の回路図では、  
 ここを、整流ダイオードとして書いている。

これで行くと、ダイアック 30 個を連ねても、LED が光る。(K1=約 6kHz)  
 $32V \times 30 \text{ 個} = 960V$   
 何と、960V である！ これは、驚きの結果だろう。  
 (フリーエネルギー間違いない！ アイ起電力間違いない！)  
 しかも、これはまだ上限ではない。  
 コイル 0c の巻き数を増やしたり、  
 さらに、アンペアの大きい FET にするなどすれば、  
 もっと上がる可能性が、残されている。  
 (さらに高耐圧の FET は、ロームのものがある、1 個千円以上する。)

● ちなみに、この状態で、2SK3799(900V,8A)を、  
 2SK3564(900V,3A)に替えると、ダイアック 26 個まで下がってしまう。

ここに、この現象の性格が垣間見える。(アンペア数が大きい程よいようだ。)

●この回路では、コンデンサ  $C=0.1\mu\text{F}$  が、スイッチングによって、一気に電荷を放出するので、瞬間的には、パルス状の大きな電流が流れる。

→ フリーエネルギーの発見(4).pdf

従って、共振回路の部品は、電流をよく通すものが必要になり、アンペアの大きなものにした。

電流がよく通れば、ウロボロスの回路が効果的に機能して、共振がどんどん強くなるのだろう。

共振回路がエネルギー溜まりになり、炉のようになっているのだろう。

その火を燃やしているのが、魔法のコイルである。

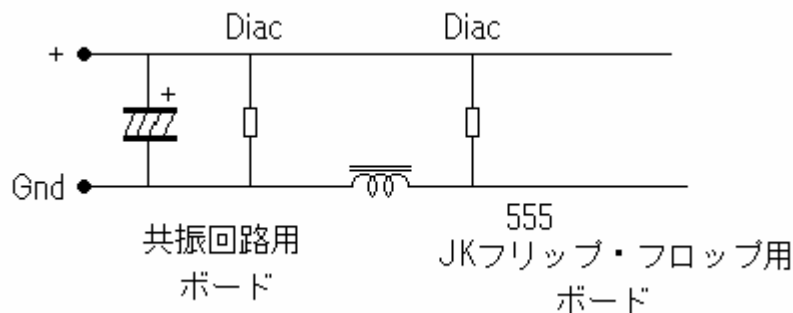
これは、原子力に替わる第4の火になる……。

うまく共振しているときは、‘ルルル…’という滑らかな音が、コイルから出ているが、共振が乱れると、‘ジリジリ…’という尖った音になる。(ギクシャクするのだろう。)

#### ●555 の回路

「フリーエネルギーの発見(2).pdf」の§3の回路において、 $R_b=500\text{k}\Omega$  可変、 $C=0.01\mu\text{F}$  としている。

#### ●スパイクノイズ



以前は、555(LMC555)や JK フリップ・フロップ(TC4027BP)が、時々壊れていた。

そこで、電源とグラウンドの間に、ダイアックを2個橋渡しにした。

これにより、背の高いノイズ(スパイクノイズ)は、ダイアックで32Vに切られる。

これを行ってからは、壊れていない。

### ●追記

それから1週間後、再び同じ実験をやってみると、何も変えてないはずなのに、なぜか、うまく共振してくれない。調べてみると、どうも、パルスが魔法のコイルを、通過していないらしい。そこで、よくわからないまま、試しにコイル0を、前回(4).pdf で使用したものに、戻してみた。(0a=5m 0b=5m 0c=20m)すると今度は、うまく共振した。しかも嬉しいことに、ダイアック 34 個でも、LED が光る。(K1=約 5kHz)これは、実に 1088V、マジかよ！

元のコイル0の方が、よかったということか。やってみないと、わからないことだ。微妙な要素があるらしい。

---

2017年3月発行 V1.0

著者:渡辺 満, 発行者:渡辺 満

Copyright 渡辺 満 2017年